

横浜発祥の柱プレートについての解説

鉄道開業

1872年(明治5年)5月7日、日本で初めて横浜～品川間に鉄道が開通した。

この時は仮営業で途中に駅はなく所要時間は35分だった。

神奈川・川崎両駅が開業したのは6月5日からで、6月10日付「横浜毎日新聞」は、「あたかも人間に羽翼を付して空天を翔るに似たり」と記している。

9月12日、横浜～新橋間が全線開通し、開業式が行われ、翌13日から営業が始まった。

片道53分、1日9往復の運行だった。

途中には品川、川崎、鶴見、神奈川の4駅が設けられた。

この日(9月12日)を陽暦に換算した10月14日が鉄道記念日である。

開業当時は横浜駅だったがその後、桜木町駅に名称が変わった。

外国郵便

アメリカとの間で日米郵便交換条約が締結され、それまでのアメリカ郵便局は廃止、新設の横浜郵便局に業務が移管されて、

1875年(明治8年)1月5日、外国郵便開業式が行われた。

洋式燈台

江戸条約によって諸外国に約束した燈台建設のために、

1868年(明治元年)8月、洲干弁天官舎跡(今の北仲通)に燈台掛の木工場が建設され、

翌年には燈台局、さらに燈台寮と改称されて、全国各地の灯台建設の拠点となった。

燈台寮お雇い技師R.H.ブラントンの指導により、

1869年(明治2年)に浮標と本牧燈船、その後燈竿の航路標識が整備され、

1874年(明治7年)には燈台寮構内に試験燈台が設置されて新しい回転燈台の点燈試験が行われた。

その日は、明治天皇、皇后が燈台寮に行幸され、わが国最初の洋式試験燈台天覧の栄に浴した。

これを記念して「明治天皇行幸 広幡忠隆謹記」碑が建立され、「灯台局発祥の地」の木標と並んでいる。

広幡忠隆は、逓信省に入って灯台局長、管船局長を歴任し、さらに宮中に入って皇后宮大夫兼侍従次長を務めた貴族院侯爵議員である。

また、現在横浜で最古といわれている灯台は、

1898年(明治29年)に横浜築港第一期工事に伴って港口部に建てられた「赤・白灯台」で、この灯台は関東大震災後修補され、赤灯台は当初位置に、白灯台は氷川丸棧橋突堤に移設された。

吹奏楽(薩摩バンド)

1868年(明治元年)、遷都により京都から東京へ向かう天皇一行が神奈川に到着した際に、沿道で出迎えた英仏楽隊が歓迎の楽曲を演奏した。

天皇の護衛に当たっていた薩摩藩士達は今まで見た事もないこの情景に感激、薩摩藩は翌年軍楽隊を創設することを決め、選抜した若者30名を特訓のため横浜に派遣した。

この時の宿舎となったのが本牧山妙香寺で、指導に当たったのは英国陸軍軍楽隊の指揮者ジョ

ン・ウィリアム・フェントンである。

猛特訓により1年足らずのうちに楽譜も見た事がない若者達が音譜を読みこなして演奏できるまでになったが、フェントンはこの若者達はその努力と習得力において非常に優秀であったと賞賛している。

1871年(明治3年)には山手公園で初めての野外演奏を行い、これが日本人による吹奏楽団創立の序であり吹奏楽活動の緒となった。

乗合馬車

1869年(明治2年)、本町通りから神奈川に直通する馬車道が開通し、

2月頃にはランガンとジョージが、5月には下岡蓮杖ら日本人商人の共同出資による成駒屋が、京浜間乗合馬車を開業した。

当時は万国橋付近に船が停泊し、荷物や人々を馬車などが吉田橋付近まで運んでいたため、その道を馬車道通りと言うようになった。

西洋式演劇場（ゲーテ座）

横浜ホテルなどいくつかの仮劇場、リズレーの開いた円形劇場、中国劇場、ヘフトの倉庫劇場など、先行した興業の場は横浜にいくつかあるが、

1870年(明治3年)に山下町に開場したゲーテ座がわが国初の本格的演劇場である。

1885年(明治18年)に現在の場所である港の見える丘公園近くに新築移転した。

収容人数は350人だった。

この建物がゲーテ座と呼ばれるようになったのは、1908年(明治41年)以降の事であり、演劇・音楽会・講演会など多種多様な目的に利用されたが、当時の観客はやはり外国人が主体で日本人は少なかった。

しかし、その少ない日本人観客の中に、滝廉太郎、坪内逍遙、北村透谷、芥川龍之介、大仏次郎など、後の日本文化に大きな影響を与える人物がいて通い詰めていたらしい。

関東大震災で建物は崩壊したが、1980年(昭和55年)、岩崎学園によって復元され衣服やアクセサリーなどの服飾関係の展示品、ゲーテ座にまつわる資料などが収められている。

なお、ゲーテ座の「ゲーテ」の語源は、詩人のゲーテではなく、英語の「陽気・愉快・快活」という言葉に由来している。

近代水道

日本初の水道は、1873年(明治6年)に竣工した横浜上水である。

さらにこれを先駆として、1887年(明治20年)、イギリス人H・S・パーマー設計監督によってより本格的な日本最初の近代水道の市内配水が開始された。

鑄鉄管、砂濾過、ポンプの三大発明を備え、有圧送水、濾過浄水、常時給水の三大特徴を有した横浜創設水道である。

貸自転車

1877年(明治10年)、石川孫右衛門が、元町3丁目で日本人初の貸自転車業を開業した。

料金は、鰻重が20銭だった当時、1時間25銭と高値だったが、とても繁盛したらしい。

スケート場

1876年(明治9年)、根岸村字立野の射撃場横の水田所有者である青木安兵衛が氷すべり場をこしらえた。

初のアイススケート場のオープンである。

西洋野菜

初代駐日総領事ラザフォード・オールコックが書いた「大君の都」によれば、

1862年までに、横浜近郊にチシャ、キクジシャ、パセリ、各種キャベツ、ハナキャベツ、芽キャベツ、レタス、カリフラワー、ラディッシュ、キクイモなどの導入に成功したとあり、

領事が提供した種からエドワード・ローレイロがこれらの野菜の大きな菜園を作り上げたらしい。

1863～1865年には、吉田新田や鶴見村、さらには根岸や磯子方面でも、西洋野菜の栽培が始められたとの記録もある。

和英辞典

ヘボン式ローマ字の創始者として知られる医師ジェームス・カーティス・ヘボンは、

1859年(安政6年)、長老派教会宣教師として夫妻で来日、神奈川区の宗興寺で医療活動を開始し、1863年には男女共学のヘボン塾を開設した。

この間、日本語の研究に打ち込み、1867年(慶応3年)、『和英語林集成』を出版した。

これが最初の本格的な和英辞典である。

キリスト教会堂

キリスト教が解禁された1873年(明治6年)以前の禁制の時代でも、外国人居留地内では教会建設が許されていた。

1862年(文久2年)、プリュダンス・セラファン＝バルテルミ・ジラルド神父によって、横浜開港後の日本で初めてのキリスト教会である横浜天主堂が山下町に建設された。

その後1906年(明治39年)に山手へ場所を移したのが現在の山手カトリック教会の始まりである。

また、1871年(明治4年)に、アメリカ人宣教師サミュエル・R・ブラウンとジェームズ・H・バラにより、現在の横浜海岸教会の地に石造の小会堂が建てられ、日本初のプロテスタント教会である「日本基督公会」が設立された。

1875年(明治8年)には500人収容の大会堂が建設されたが、それが横浜海岸教会である。本来の建物は関東大震災で崩壊したが、1933年(昭和8年)に現在の会堂が再建された。

銀杏並木

銀杏並木がすばらしい日本大通りは、明治3～4年頃に完成した日本初の西洋式街路である。

生糸

外国商人は早くから日本の生糸に注目していたが、

1859年(安政6年)、現在の西区にあった芝生村の商人芝屋清五郎が初めて英人エスクリッゲに甲州生糸を売り込んだ。

洋式競馬

1860年(万延元年)、山手のふもと現在の元町のあたりで開催されたのが洋式競馬の最初である。
1862年(文久2年)には、より本格的な競馬会が開かれた。
その後会場は山手の練兵場などに移るが、
1866年(慶応2年)、根岸の丘の上に競馬場が完成、横浜レース・クラブに使用権が与えられた。

射撃

1865年(慶応元年)、根岸村字立野（現在の和町商店街）に外国人のための射撃場が設けられた。
この年のうちにスイス・ライフル・クラブと横浜ライフル協会が組織され、後者による最初の競技会も開催された。
和町商店街が1km近くまっすぐなのは射撃場が道として残ったためである。

瓦斯燈・西洋花火大会

1872年(明治5年)、高島嘉右衛門が結成した「日本社中」の権利獲得によって建設した横浜瓦斯会社により、大江橋より馬車道、本町通りにかけて日本初のガス灯が灯った。
また、明治7、8年頃に平山甚太が横浜太田町で開業した煙火工場は、マッチの原料として横浜に輸入された塩素酸カリウムを日本の花火に応用して色付花火(西洋花火)の研究を始め、明治10年11月、その平山煙火により横浜公園で日本初の西洋花火大会が開催された。

テニス・野球

1871年(明治4年)、居留外国人が野球チームを結成、太平洋郵船の貨客船コロラド号チームと対戦した。
これが日本で行われたもっとも早い野球試合である。
その4年後には横浜ベースボールクラブが組織されている。
また、1876年(明治9年)、居留民の夫人たちによってテニスクラブが組織され、のちにレデース・ローン・テニスクラブと命名された。
現在の横浜インターナショナルテニスクラブである。
コートは、最初、横浜公園にあったが、翌々年、山手公園の使用権を得た。

寫眞

横浜港が開港した翌年1860年(万延元年)に、アメリカ人O・E・フリーマンが横浜に初の写真館を開いた。
その事業を引き継いだ日本人第一号の鵜飼玉川が開業したのは江戸だったが、その後、初の日本人写真師下岡蓮杖が、1862年(文久2年)に横浜に写真館を開業した。

西洋理容

1864年(元治元年)に横浜ホテルで開業したファーガソンのヘアー・ドレッシング・サロンが最初である。
日本人が業を起こしたのは明治に入ってからで、政府の断髪令に先がけて、1869年(明治2年)、小倉虎吉が横浜にわが国初の西洋理髪店を開業、ザンギリ頭と呼ばれて文明開化の一翼を担った。

潜水

石川町の増田万吉が、弾薬倉庫船の船底修理を請け負ったのがきっかけで潜水術を学び、1872年(明治5年)頃に開業した。

30数人の発起人によって居留地に内外潜水業請負会社を設立したのは1889年(明治22年)のことである。

アメリカ麦

1860年(万延元年)、神奈川奉行の指示により鶴見村と生麦村でアメリカ麦の栽培が試みられた。

時計

開港後もたらされた西洋時計、とりわけ懐中時計の精密さに日本人は目を見張ったことだろう。

記録によって確かな最初の時計修理の技術者は、1859年(安政6年)末にはすでに横浜にいて日本人から「トケイヤ フラルコ」と呼ばれたアメリカ人フォークである。

西洋時計が本格的に輸入されるようになったのは、1864年(文久4年)にスイス人ファヴルブラントが現在の山下町に商館を開いてからで、

ファヴルブラントは、明治時代の初期に、横浜の町会所や郵便局をはじめ日本各地に時計塔を設置するとともに、『時計心得草』という啓蒙書を発行、また日本人時計師のスイス留学を斡旋するなど、時計産業の功労者として知られている。

夜会

1862年、オランダ領事館が神奈川から横浜に移転、翌年、内外の貴賓が会して一大祝宴が開かれた。

氷水屋アイスクリン

1869年(明治2年)5月9日、馬車道で町田房造が開業した氷水店から売り出された「あيسくりん」が、日本のアイスクリームの誕生。

西洋洗濯業

1859年(安政6年)、青木屋忠七が横浜本町で西洋洗濯業を始め、

ついで岡澤直次郎が横浜元町に「清水屋」を開業、脇澤金次郎がこれを継承するなど、居留外国人向けの衣類洗濯業が先行した。

日本人向けの本格的な西洋式の洗濯業は、

渡辺善兵衛が1862年(文久2年)に太田町(現在の中華街北門付近)で始め、小島庄助、脇澤金次郎がこれに続いた。

(未掲示)横浜開港

最初に調印された日米修好通商条約では、神奈川・長崎・函館を1859年(安政6年)7月4日に開港することになっており、

日蘭はそれに倣ったが、日露・日英と日仏は日付が違う。

結局、最恵国条款により、五か国すべてに対して7月1日(陰暦6月2日)に開港されることになった。

条約では神奈川が開港場に決められていたが、神奈川の一部だという口実で実際には横浜が開港された。

東海道に沿う神奈川では外国人との間のトラブルが予想され、辺鄙な横浜の方が取締りやすいとかながうられたからである。

水深の深い横浜は港として優れており、背後に市街地として開発しうる新田地域がひろがっていたので、開港後、横浜は急速に発展して行く。

(未掲示)海水浴場(富岡)

江戸末期、横浜開港とともに多くの外国人が訪れるようになると、

海水浴に適した場所を求めて横浜・富岡あたりに外国人が逗留するようになった。

その付近は、かつて白砂青松の素晴らしい浜辺だったので、

ヘボン式ローマ字で著名なヘボン博士などもこの地が東京湾で一番海水浴に適していると推奨し、一躍脚光を浴びる場所になった。

その後、井上馨・伊藤博文・三条実美・松方正義など数多くの中央政界の大物たちが別荘を富岡海岸に構え、「夏は富岡で閣議が開ける」とまで言われるほどだった。

海水浴場の発祥については、大磯の方がよく知られているが、富岡が早い。

(未掲示)鉄製トラス橋(吉田橋)

吉田橋は日本最初の無橋脚鉄橋で、現在の吉田町側から港町側の土手に架けられた。

作られた当初は鉄製ではなく、木製の橋であったがために、すぐに損傷して修繕を余儀なくされ、その際に鉄を使った橋に変わった。

修繕を依頼されたイギリスの土木技士であるリチャード・ヘンリー・ブランソンは、壊れない橋をとの地元の要望を受けて建設計画と設計を起案、

イギリスから鉄材等を取り寄せ、1869年(明治2年)初めに着手、

10月には、三角形を基本単位とした骨組みの日本最初のトラス鉄橋として生まれ変わった姿を見せた。

日本人にとって鉄製の橋は珍しく、人々はこれを「カネの橋」と呼び、横浜名物の1つになった。

「カネの橋」と呼ばれたのにはもうひとつ理由があり、

吉田橋を渡る時、番所で橋銭という通行料を払わなければならなかったのである。

時代が変わって橋の寿命も終わり、

「カネの橋」は1911年(明治44年)、鉄筋コンクリートに作り変えられ、その容貌は橋というには程遠いものになっている。

(未掲示)日刊新聞発刊(横濱毎日新聞)・新聞販売(売捌人安藤小政)

1870年(明治3年)、横浜活版舎から創刊された「横濱毎日新聞」が日本初の日刊邦字新聞である。

この新聞はその後、「東京横浜毎日新聞」、「毎日新聞」、「東京毎日新聞」と改題して存続していたが、昭和16年に廃刊された。

今の毎日新聞とは関係がない。

幕末から明治初年にかけて発行された新聞は、絵草紙屋や書店で販売されていた。

『横浜毎日新聞』などの近代的な新聞が創刊されてからも、しばらくはそのような状況にあったという。

『横浜毎日新聞』の創刊号には、毎日購入する読者には活版舎から直接配達し、遠方の購読者には最寄の取次所から届けると書かれている。

新聞の販売人、販売店が登場するのは10年ほどあとのことである。

中でも飛びっきりの異彩を放つ人物が、政次郎安藤政吉、通称新聞小政であろう。

資料によれば、1880年(明治13年)、25歳の時に横浜にやって来た小政は、弁天通で新聞取次業を営み、横浜市尾上町に移転して諸新聞の委託販売を開業、後に常盤町に移って諸新聞売捌所(販売店)を設置した、とある。

販売人から始まって、販売店を持つようになったということだろうか。

当初は、襟に諸新聞小政と染め抜いた印半纏に紺の股引・腹掛け姿で、黒塗りのはさみ箱を担ぎ、鈴を鳴らして市中で新聞を売り歩いていた。

小柄だったため「小政」と呼ばれるようになったらしい。

その粋で鯔背な姿がいかにかっこ良かったかは、五代目尾上菊五郎が歌舞伎にしたことでも明らかだろう。

劇中で新聞売小政の扮装をして人気を博した。

その姿は錦絵にも刷られ、絵草紙屋の店先にまで小政の名前と評判は広がったと伝えられている。